

## 多摩 ローム層テフラの再記載と対比

### Re-description and correlation of tephra layers in the Tama-I Loam Formation

# 中里 裕臣[1]; 中澤 努[2]; 水野 清秀[3]

# Hiroomi Nakazato[1]; Tsutomu Nakazawa[2]; Kiyohide Mizuno[3]

[1] 農工研・造構・土木地質; [2] 産総研・地球科学; [3] 産総研 活断層研究センター

[1] NIRE; [2] GSJ, AIST; [3] Active Fault Research Center, GSJ/AIST

演者らは関東平野中央部の詳細な地下地質構造の解明と伏在断層の活動度評価を目的として、新旧のボーリングコアについて、テフラの検出及び対比に基づく中上部更新統の編年を行っている。これまでに、中部更新統相当層からは角閃石に富むデイサイト質な軽石型テフラが多く認められているが、同じ層準と考えられる陸上の上総層群上部～下総層群中部にかけては両輝石を主とする安山岩質な軽石型テフラが主体であり、直接的な対比が困難な状況にある。これは陸上における上総層群・下総層群の分布域が、テフラの主要な給源と考えられる箱根火山の東北東に位置するのに対し、関東平野中央部は箱根火山の北東～北北東に位置し、箱根起源テフラの分布中軸からはずれることに起因すると考えられる。

一方、多摩丘陵北部、関東平野西縁丘陵及び秩父盆地尾田蒔丘陵には角閃石に富むテフラを多く挟在する多摩 ローム層が分布する。多摩 ローム層のテフラは、最近関東火山灰グループ(2001)によって、狭山丘陵、尾田蒔丘陵などを模式地として系統的な記載が行われ(Tama101-128)、鉱物組成及び角閃石の屈折率が示された。これらの角閃石に富むテフラは関東平野中央部地下のテフラと対比される可能性が高い。このため、本研究では関東平野中央部の西方に位置する尾田蒔丘陵において多摩 ローム層のテフラ(Tama105-124)の再記載を行った。さらに、多摩 ローム層中部の指標テフラ TE-5(Tama118)の上下層準において、給源火山と考えられる八ヶ岳及び黒富士起源のテフラと、テフラの保存の良い千葉県北東部の犬吠層群(酒井, 1990)のテフラについて屈折率特性及び軽石型火山ガラスの主成分組成の検討を行った。その結果、以下の知見が得られた。

- ・尾田蒔丘陵の多摩 ローム層テフラの角閃石の屈折率は、レンジ(1.665-1.674)及びモード(1.668-1.671)ともに類似の特性を示す。しかし、Tama105のみレンジ(1.669-1.683)、モード(1.675-1.676)と有意に高い特性を示す。また、鉱物組成としてカミングトン閃石及び石英の含有量に違いが認められる。

- ・鈴木(2000)および町田・新井(2003)は、Tama120を八ヶ岳のho-白pm及びTE-5up(斉藤, 2000)に対比した。しかし、Tama120はカミングトン閃石を含む点(ho-白pmは含まない)、ho-白pm( $n=1.509-1.515$ ,  $K20=2.8-3.1$ )とTE-5up( $n=1.503-1.509$ ,  $K20=2.0$ )は火山ガラスの屈折率及び主成分化学組成が異なる点から、それぞれ対比されない可能性が高い。

- ・甲府盆地曽根丘陵におけるTE-5下位の黒富士火砕流と犬吠層群TE-5upの火山ガラスの主成分化学組成はよく一致する。TE-5upは黒富士起源の可能性がある。

文献：関東火山灰グループ(2001)地球科学、55；酒井(1990)宇都宮大紀要、23；鈴木(2000)月刊地球、22；町田・新井(2003)新編火山灰アトラス；斉藤(2000)第四紀研究、39